

No. 213 チラシスタンドにおける視認性の実態調査

滝本研究室（インテリア・プロダクト分野）A22AB053 鬼頭亜実

1. 研究の背景

近年多くの施設でチラシが主要な情報発信手段として用いられている。しかし実際にはチラシのデザインとスタンド構造が適合しておらず、タイトルやメインビジュアルが隠れる事例が見られる。こうした視認性の低下は情報伝達を阻害する可能性があり両者の関係性の検証が必要である（図1）。



場所：戸田川緑地公園/タイトルが見えない
場所：あおなみ線名古屋駅/タイトルが見える
図1 チラシのタイトルが見えない/見える例

2. 研究の目的

本研究では、2つの調査を通して、チラシデザインにおける視認性確保のための示唆を得ることを目的とする。

3. 調査1 スタンド型式別視認性調査

【目的】チラシスタンドの型式によって視認性にどのような差が出るのかを明らかにし、チラシが見えやすくなるレイアウトの条件を整理することを目的とした。

【方法】A～E型式に分類したスタンドを各20台、合計100台調査した（図2～図7）。A・B型式では段ごとの視認可能領域を計測し、C型式ではチラシ収容率を算出した。D・E型式は複合型式である。



図2 チラシスタンドの型式分類



図3 A型式について



図4 B型式について



図5 C型式について

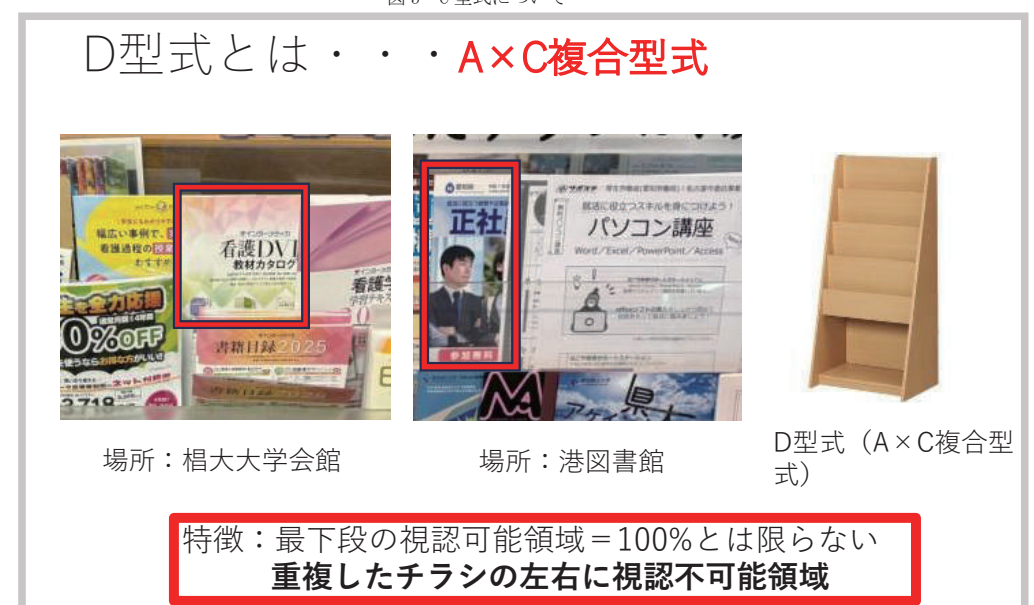


図6 D型式について



図7 E型式について

4. 調査 2：設置場所別調査

【目的】調査 2 では、施設の種類によって、どの型式のチラシスタンドが使用されているかを調査した。

【方法】公共施設、交通関連施設、商業施設、医療・スポーツ施設、教育・文化施設の 5 種類に分け、各 20 台・合計 100 台のスタンドを対象に、A～E 型式のどれが使われているかを記録して比較した。

【結果】全体では A 型式が半数以上（53 台）と最も多かった。交通関連施設と商業施設では A 型式が 70%を占めた。公共施設では A・B 型式が同程度で、他の型式もバランス良く使われていた。医療・スポーツ施設では A 型式が多かった。教育・文化施設では A 型式に加えて C・E 型式といった情報量を扱いやすい型式も多く見られた（表 2・図 19）。

表 2 設置場所別調査 集計結果表

	A型式	B型式	C型式	D型式	E型式	合計(台)
公共施設	5	5	3	4	3	20
交通関連施設	14	3	1	2	0	20
商業施設	14	1	2	0	3	20
医療・スポーツ施設	12	0	3	0	5	20
教育・文化施設	8	2	5	2	3	20
合計(台)	53	11	14	8	14	100

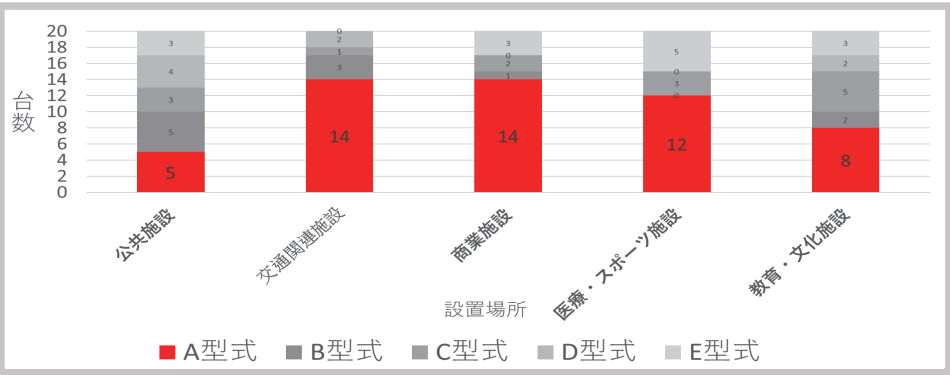


図 19 設置場所別調査 集計結果グラフ

【考察】全体で A 型式が過半数を占めたのは、省スペースで構造が安定し運用性にも優れ、どの施設でも使いやすいためだと考えられる。

交通関連施設では、省スペースで多くの情報を掲示できる型式が多く、公共施設では、チラシをじっくり確認しやすい型式が選ばれる傾向があった（図 20・図 21）。型式選定は空間特性と利用者行動に基づく合理的な判断であることが示された。



図 20 交通関連施設 A 型式

図 21 公共施設 C/D 型式

5. 総括

調査 1 では、チラシスタンドの型式による視認性の差と、その共通要因を明らかにした。また、調査 2 では、型式の選定が空間の特性や利用者の行動を踏まえて行われていることが明らかにした。

本研究の成果として、設置環境に応じたスタンド型式の選択と、視認されやすい領域を考慮したレイアウトが、視認性と利用効率の向上につながることを実証的に示した。これにより、設置場所ごとに適した型式およびレイアウトの指針を提示できた点を、本研究の新たな知見とする。今後、チラシ制作段階からスタンド型式や設置環境を想定したレイアウトを考えることが重要であると考えられる。

【結果】A 型式は下から 2 段目以上のチラシ下部に視認不可能領域が確認された（図 8・図 9）。B 型式は上から 2 段目以下のチラシ上部に視認不可能領域が確認され、下段ほど視認可能領域が減少する傾向が見られた（図 10・図 11）。C 型式は収容率が 100%を超えると手前のチラシで奥がほとんど見えなくなるケースが多かった（図 12・図 13）。D・E 型式も、以下の結果となった（図 14~図 17）。

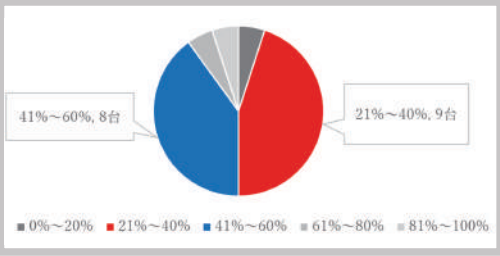


図 8 A 型式上部の視認可能領域（台）

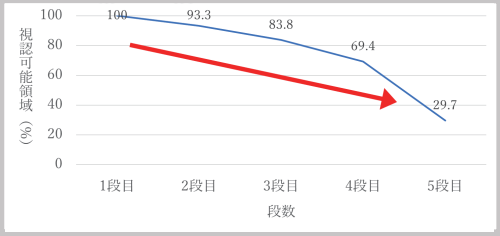


図 10 B 型式段の違いによる視認可能領域の変化

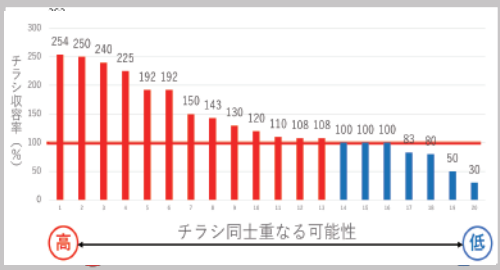


図 12 C 型式スタンド 1 台におけるチラシの収容率



図 9 A 型式 視認可能領域：45.7%/34.3%



図 11 B 型式 下段ほど視認性低下傾向



図 13 C 型式 収容率：約 240%/約 30%

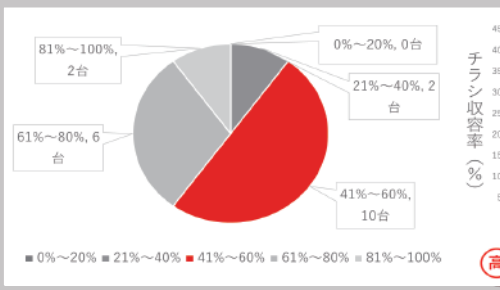


図 14 D 型式上部の視認可能領域（台）

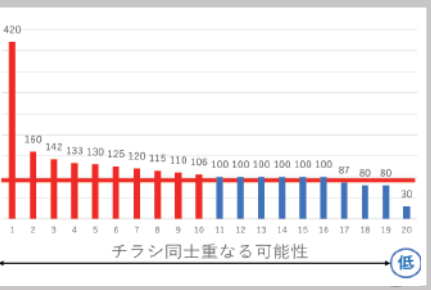


図 15 D 型式スタンドチラシの収容率

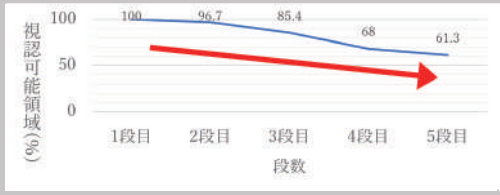


図 16 E 型式段の違いによる視認可能領域の変化

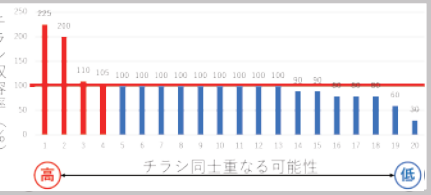


図 17 E 型式スタンドチラシの収容率

【考察】結果を踏まえて、各型式の視認可能領域と、それに伴うチラシレイアウト指針を示した（表 1・図 18）。

調査 1 では、型式の違いにより視認性には差が生じたが、共通して「情報の配置位置」と「チラシの重なり・収容率」が視認性に大きく影響することが明らかとなった。

表 1 各型式チラシレイアウト指針

型式	構造的特徴	レイアウト上での配慮点
A型式	仕切りあり、省スペース・効率性重視	重要情報はチラシ上部30%以内に配置する。
B型式	傾斜あり、段数による優先配置可能	下段ほどチラシ下部に重要情報を配置する。
C型式	仕切りなし、情報量重視	重要情報は左右部分に配置し、収容率が100%以下に保つ。
D型式	A+Cの複合型、効率性と情報量の両立	上部に重要情報を置き、過剰収容を避ける。
E型式	B+Cの複合型、優先配置と情報量のバランス	下段の下部に重要情報を配置し、過剰収容を避ける。

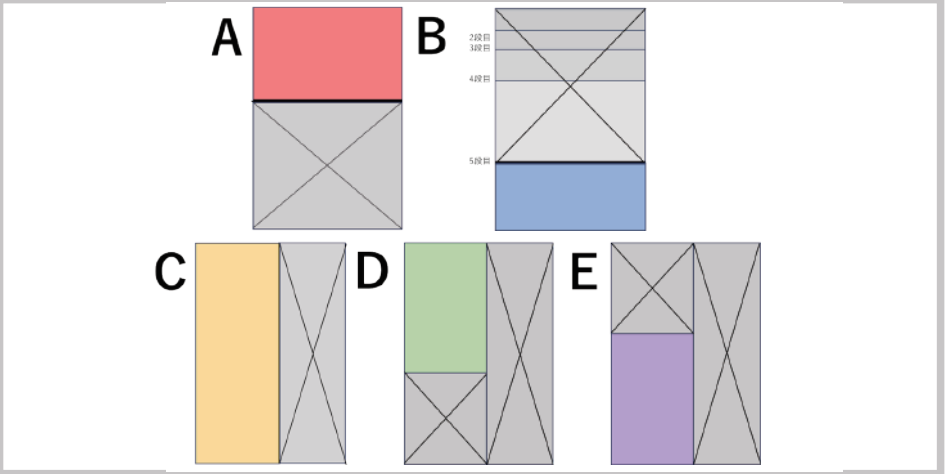


図 18 各型式視認可能領域